
あの世界の向こうに

海渡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの世界の向こうに

【Nコード】

N7171A

【作者名】

海渡

【あらすじ】

普通の高校生の水面佳祐^{みなもけいすけ}はある日ひょんな事から異世界に行ってしまい魔法の力を身につける。そして元の世界に戻ってきた水面達はある人物に衝撃の真実を言われるのだった…。

第0話：いつもの日常

『ああ〜！ダリい〜！』

そんな事を言いながら歩いているのは水面^{みなも} 佳祐^{けいすけ}だ。

佳祐は16歳でいたって普通の高校2年生だ。

佳祐の性格を一言で言えばめんどくさがりだ。

今日もダルそうに歩いて学校に向かってしていると後ろの方から

『佳祐え〜！』

と声が聞こえてくる…。

第1話：向こうの世界へ

その声の主は木瀬^{きせ} 亮^{りょう}とゆう佳祐の友達だった。

『よ！佳祐！』

『おう。亮じゃんか。』

そしてたわいもない話をしているといきなり亮が『腹が…』と言って公園のトイレに駆け込んだ。

佳祐はそんな亮を笑いながら見ていた。するといきなり

『うわ～！』

とゆう亮の叫び声が聞こえてきた。

佳祐は慌てて亮の入ってるトイレのドアを蹴破り中へ飛び込んだ。すると床ない…？

『うわ～！』と叫びながら佳祐は床のないトイレに落ちていった。

佳祐が目覚ますとそこは見知らぬ草原だった。

『ん？ここわ？』

佳祐はよくわからない状況で考えていると亮がいない事に気付いた。亮をさがさなければと佳祐は草原から見える遠くにあるであろう大きな建物へ歩きだしていった。佳祐がずっと歩いていると草むらの中から物音が聞こえてきた。

佳祐が不思議そうに草むらを除きこむと獣が飛び出してきたのだ！

『なんだ！？コイツ！』

それはよくゲームで見るモンスターによく似ているのだ。

その獣は唸り声をあげながら佳祐へ襲いかかってきた。

『うわ！痛ッ…』

痛みもある。この状況は夢じゃないみたいだ。

佳祐が戸惑っているといきなり獣は叫び声をあげて燃えだしたのだ。

佳祐がわけもわからず呆然していると後ろから声がしたのだ。『

武器も持たずにこんな所で何をしているんだ？君は？』

『あの…俺達は…』佳祐は今までの経緯を話すと、その青年は

『よくわからないが我々の城へくるといい。もしかしたら仲間にも会えるかもしれないぞ?』

『じゃあお願いします。』

そうして二人は城へ向けて歩きだしたのだ。

聞くところによるとその青年はユダとゆうらしい。年は俺とそんなに変わらない。

ユダと話してゐるうちにあることに気付いた。ユダの服装がゲームのキャラクターによく似ているのだ。

そして佳祐は『あの…ここはどこなんですか?』と聞いてみた。

するとユダは『ここはレイル地方に決まってるじゃないか。』

と当たり前のように言ってきた。

当然佳祐はレイルなんて聞いた事がない。

さっきまで自分達は日本の東京都内の公園のトイレにいたのだから。

ユダは困ってる佳祐を見ると苦笑いしながら『早く城へ行こう。佳祐は疲れてるみたいだからな。』

と歩くペースを早めた。

第2話：魔法の属性。友との再開

二人で歩いていると佳祐が口を開いた。

『ところでさつきなんでいきなりあのモンスター燃えたんですかねー？まさか魔法でも使ったわけでもあるまいし。アハハッ』

『魔法？使ったよ。あんなの簡単じゃん。』ユダは言う。

佳祐は『ユダ魔法使えんの！？俺も使えないかな？』と凄い興味を示している。

そんな佳祐を見てユダは『お前魔法使えないのか？ならまずは城の研究所でお前の属性を調べなきゃな。』と言う。

佳祐は『属性ってなに？よくわかんないんだけど…？』

『属性ってのは魔法を使う奴の性質が火・水・土・風・念・光・闇のどれかって事だよ。まあまずは城に行ってお前の属性を確かめなきゃな。』

そんな話をしていると目の前に大きな街が見えてきた。

街の入り口に（レイル城下町）という立て札がある。

街の中を歩いていると（サリーのなんでも屋）という看板がかかったお店があった。

『あのさーユダにお願いがあるんだけど…』

『…何を買って欲しいんだ…？ハア…』

『さっすがユダ！話わかんじゃん！んと…じゃあコレは？』

佳祐が手にしたのはホコリの被った双剣だった。

『別にいいよ。それ安いし。』

とゆうわけで佳祐は双剣を得意げに振り回しながら街を歩いていた。

『おい佳祐！危ないだろ！一応武器なんだから！』

そんな注意をしていると佳祐が『城に着いたじゃん！うわ〜でけ〜！なんだこの城！』

『ここはレイル城だ。一応俺はこの城の騎士団長なんだけどな！』
ユダは得意げである。

そして城の中へ入り魔法の属性を調べる部屋に入った。

するとその部屋の人が『これから属性を調べるので意識を集中してください。』と言った。

佳祐は言われた通りに意識を集中するとまばゆい光が部屋中に広がった。

ユダは『こ…これは光！？まさか…とにかく俺と一緒にきてくれ！』
そう言われてユダに連れてこられた所はゲームという王座の間というところだった。

そこで佳祐は亮の姿を見た。

亮の話によれば亮も魔法の属性を調べてもらった後ここに連れてこられたらしい。

そこで二人はレイル城の王様に話を聞くのだった。

第3話：光と闇。 予言の書。 ほんのわずかな修行

王様は二人にこう言った。

『救世主様。 よくぞ我が城へ』

『救世主！？俺達が？』

二人は明らかに戸惑っている。

王様は話を続けた。

『ここに予言書がある。 この本の最後のページにはこう書いてあるのだ。』

（この大戦を終結に導く者あり。 その者は光の剣で闇をけしさり、またある者は闇で全てをおおったという。 この二人は全ての属性の者達をひきつれ魔王を打ち倒すだろう。）と。 書いてある。

『その光とかどうとかが俺となんの関係があるんだよ！光と闇の属性なんてこの世界にはたくさん…』

亮がそう言いかけた時ユダは言った。

『いないんだよ』

『は？』

『この世界で光と闇の属性の奴が現れたのは初めてなんだよ！』

『なっ！？』

二人は戸惑っている。

『まあお前らが戸惑ってるのも無理はない。 とにかく今から魔法の訓練だ。 わかったな？』

ユダに凄い気迫で言われたただ二人は言われた通り魔法の訓練をするしかなかったのだった。

そして魔法を訓練するであろう場所につれてこられ、ユダはこういった。

『いいか？これからの訓練はかなりキツイぞ？覚悟しとけ。』

そして訓練は始まった。

『まず魔法を使うには集中が大事だ。 気持を集中させてみる。』

二人は言われた通りに集中した。すると佳祐の周りには白い色のオーラが。亮の周りには黒いオーラが現れた。

『なんだこれ？』

『無駄口を叩くな！次にそのオーラを手集中させるイメージをもて。』

するとオーラは収まり今度は二人の手がオーラに包まれてきた。

『いい感じた。そして最後にそのオーラを目の前の木にぶつけてみる。イメージするんだ。』

すると二人の口から自然と言葉がでた。

佳祐の口からは

『ライト』

亮の口からは

『ダーク』

と。その言葉と共に光と闇の玉がそれぞれ木に向かってとんでいった。

すると木は跡形もなく消え去っていた。

『凄い…さすが救世主』ユダは驚きを隠せない。

一方二人は

『かつこい〜！』

『楽し〜！』

などと今の状況を楽しんでいる。

するとユダは『俺がお前達に教えられるのはここまでだ。俺には光と闇の魔法の種類なんて想像もつかないからな』

『な…なんだよ！無責任じゃないか！』

佳祐は怒りモードだ。

しかし佳祐達には怒ってる時間などなかったのだった。

第4話：謎の人影。そしてもとの世界へ

いきなり三人の目の前で空間が切り裂かれた。

『な…なんだ！？』

ユダ達は戸惑いを隠せない。

するとその空間の間から人影が見えてきた。するとその人影から声がしてきた。

『ハハっ　いきなり光と闇の反応が消えたと思ったらやっぱりこの時代にきてたんだ　残念ながら君達はこの時代にいてはいけな
いはずの人達だよ。だから元の時代へかえりなさいッ』

するとその人影は

『タイムボール』

そう唱えるやいなや、佳祐と亮に向かって真っ黒なボールをぶつけてきたのだ。

当然二人は避けられるはずもなく

『うわあっ…』

『くそっ…』

と唸り声をあげている。

一方ユダはその人影から発せられる気迫に圧倒されてか、その場で立ち尽くしている。

すると佳祐と亮はいきなりそのボールの中に引きずりこまれてしまい、跡形もなくその場から消え去ってしまったのだ。

『ハハハ…。君達がどこまで強くなれるか楽しみだ！　まあそのうち会おう』

人影はそう言い残しその場から姿を消したのだった。

後には部屋で立ち尽くしているユダだけが取り残されたのだった…。

一方、佳祐達というと…

『う…うん？　ここは…公園？』

先に起きたのは佳祐のようだ。

ふと佳祐が周りを見渡すとさっきまでいたはずの部屋から自分達が消えたはずの公園にいたのだ。

ふと佳祐が周りを見渡してみると亮が倒れている。

『おい！亮！起きろ！』

『う…う…ん。ここは？』

『公園だよ！俺達夢でも見てたのかな？』

『でも公園なんかで倒れてるのはどう考えても変じゃないか？』

『まあそれもそうだけど…。あ！学校間に合わないんじゃない？』

佳祐が時計を見ると学校が始まるまで後10分しかない。走ってギリギリつく時間だ。

『急ぐぞ亮！』

『ん？ああわかった！』

二人は学校へ向かって走っていったのだった。

第4話：謎の人影。そしてもとの世界へ（後書き）

初めて後がきを書きます！どうも皆さん 海渡です。

いやゝ生まれて初めての小説ですよ！もうなんか緊張の連続で…。笑

更新は遅れるかもしれませんが、これからもこの小説をよろしくお

願いますm（――）m

できれば感想もお待ちしております！

以上！海渡でした

第5話：謎の男。そして初めての实战

その後は何ごともなく1日が終わって放課後…。

『佳祐！ 帰ろうぜ！』

『別に今日は予定もないし…帰ろうか』

そして二人は学校から続いている大通りから一本ズレた狭い路地を歩いていった。二人の家はいわばお向かいさんなので帰る方向も同じなのだ。

二人がたわいもない話をして歩いているといきなり大きな炎が降ってきた。二人は間一髪それをかわして炎の向かってきた方向を見た。

『なんだよ一体…。なあ佳祐？』

『さあ…？てかお前は誰だ！！ 姿を見せろ！！』

すると建物の影から一人の男が現れた。

『今のをかわすとはなかなかだな。さっそくだがお前らには死んでもらう』

すると男は突然腰に付けてた剣を取り出し亮に向かって走っていった。

『死ね！闇の使者！』

男の剣が亮にあたりそうになった時、

カキン

と、金属と金属がぶつかる音がした。

怖くて目をつぶっていた亮が目を開けるとそこには双剣で男の剣を防いでいる佳祐がいた。

『佳祐！？なんでお前がそんなもの？…銃刀法違反じゃないか！』

『なんかカバンに入ってたから…夢だと思っていたけど夢じゃなかったらしいぞ？ あの世界。てか…ツツコむとこ違うだろ！』

男は剣を防がれた事が意外だったのか一度二人から距離をとった。

『まさか俺の剣を防ぐとは…。ではこれならどうだ？』

すると男は呪文のようなものを詠唱し始めた。

『我を取り巻く大気の炎よ。今その力を解放せよ…』
すると男の手の平に大きな炎が形づくられていった。

『ヤバイよな…？ 魔法だぜ？』

亮が焦っていると、突然二人の後ろから声がした。

『お前らの力を見せてみる。お前らならできるはずだ』

『もしかして魔法を使えって事か！？』

と佳祐。

『しょうがない…やるか！いくぞ！佳祐！』

『おうッ！』

二人は意識を集中した…。

第6話：初戦闘終了。謎の男。謎の組織

二人が手に意識を集中すると佳祐の手は光輝き、亮の手は漆黒に包まれた。

『ではそろそろ決めさせてもらう…。フレアボール！』

男は大きくなった炎の玉を二人に向けて放ったのだ。

『いくぞ！ 亮！ ライト！』

『わかった佳祐！ ダーク！』

二人が同時に言葉を唱えると光と闇のボールが大きな炎の玉を突き抜け男に直撃した。

『うつ…。やるな…。さすが伝説の使者…。しかし次に会ったときはお前達を殺す！ 覚えとけ！ バッシユ！』

男がそう唱えると姿を消してしまった。

『はあ…。はあ…。俺達勝ったんだよな…。？』

『ああ…。みたいだな…。てかあんたは一体何者なんだ？』

佳祐はそう言うとき二人に魔法を使えと言った男の方を見た。

『そうだよ！ なんて俺らが魔法を使えるってこと知ってるんだよ？』

亮もその男の方を見た。

すると男は

『ああすまない。自己紹介がまだだったな。亮くん、佳祐くん。私の名前は葛城孝介だ。一応、レムリスの所長をやっている。』

『は？レムリスってなんだよ？』

佳祐が気になるのも仕方がない。

すると男は

『レムリスとは君達みたいに魔法の使えるなかのエキスパートが集まっている組織だ。さっそくだが明日は日曜だし、レムリスの本部へきてくれ』

そう言っつて男は地図を二人に渡し去って行った。

二人はただただ仕方なく家へ帰りながら明日の待ち合わせの時間などを決めてお互いの家へ帰って行ったのであった。その夜、二人が眠れなかったのは言うまでもない。

第7話：いざ！レムリス本部へ

そして次の日。二人はちょうど12時に駅で待ち合わせていた。そして二人は昨日もらった地図の通りにレムリスの本部へ向かったのだ。

そしていざレムリス本部を見るとその規模の大きさに驚いていた。

『やべ〜！ でかいよ〜！ 凄いな！ 佳祐！』

『うん…。あ！あの人に聞いてみよう！ すいませ〜ん』

『はい？ なんでしょう？』

佳祐は本部の受付と思われる女性に声をかけた。

『あの…。昨日葛城って人にここに来てって言われてそれで…。』

『ああ〜！ 君達があのだ…。えつと葛城所長ならこの道をまっすぐ行った突き当たりにいます』

と、地図を指差しながら丁寧に教えてくれた。

『ありがとうございます。行くぞ亮』

『ま…。まてよ！ 置いてくなく〜！』

二人は受付の人に言われた通りに行くと（所長室）と書かれたドアの前についた。

佳祐はドアをノックして

『すいませ〜ん！』

と言つと

『開いてるから勝手に入りなさい』

とゆう返事がしたので二人は部屋の中へ入ると、小さめの机に昨日会った葛城と名乗る男が座っていた。

『ああ！ 君達か。ささ、ここに座りなさい』

と近くの椅子を指差し、佳祐達は言われた通りに席についた。

『やあ。昨日は急にごめんね。驚いたでしょ？』

『はい！ そりゃあもう…てか、なんだったんですか？ あの俺達を殺そうとしてきた奴らは？』

『まあ慌てるな。今から君達に全てを話す。…紅茶でいいかい？』

『あ、はい』

すると葛城は二人に紅茶を入れて自分も紅茶を一口すすると語りだした。

第8話：二人のこれから（前書き）

更新遅れてごめんなさい（、、）

第8話：二人のこれから

『昔：もう何万年も前の事なんだが、魔法が当たり前に使われていた時代があったそうだ。そんな世界である日ジェイドとゆう人物が悪魔に身を売り世界を崩壊に導いたという…』

そんな時に現れたのが光と闇の魔法を使う二人組だった。二人は様々な魔法を使いジェイドを打ち倒したという。

そしてその後、ある占い師がこれから先の未来に二人の生まれ変わりが現れ、再び訪れるであろう世界の危機を救うだろうと予言した。それからレムリスという組織は光と闇の力を持つ者を探し続けた。

それが君達なんだ。

予言によると君達はジェイドと同じ（時）の属性の者を倒す事になっている。

そして君達を襲ったのはおそらく（時）の属性の者の手下だろう…。で、だ。君達に頼みがあるのだが…』

そう言つて葛城はまた一口紅茶をすすった…。『なんですか？お願いって』

佳祐は葛城に聞いた。すると

『君達にはこれから新しい学校に通ってもらいたい。君達と同じ魔法の使える人が通う学校だ。もう入学手続きはしておいたから。君達の親にも事情は話してあるから今日から私達の用意した家に二人で住みなさい』

『は！？なんだよそれ！』亮は怒っている。

『頼む…わかつてくれ！さもないと世界は滅ぶかもしれないんだ！』
『滅ぶって…実感わかないな…。でもしょうがないか！な！亮？』

『わ…ったよ！葛城のおっちゃん！』

『おっちゃんはやめなさい…亮くん…では、これから君達には戦闘のための訓練を行なってもらう』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7171a/>

あの世界の向こうに

2010年11月5日07時14分発行